

角田農業戦略プラン実践編作成の学習会開催

角田農業戦略プラン実践編作成のための学習会が八月二十日と九月四日の二回開催されました。

一回目は角田駅オーク・プラザで開催され、東京農業大学副学長の門間敏幸氏を講師に招いて、「二十一世紀の農政改革の方向について」と「角田農業戦略プランの現代的意義について」学びました。以下、門間教授の講演を簡単に紹介します。

フードシステムと農政改革
今までは生産すれば終わり、消費者はまた別ということだったが、これからは、生産から加工、流通を含めて経営を展開していくことと、農業と食品産業の連携が必要である。食市場は八十兆円の規模がある。

新たな担い手支援策
これから日本の農業は何で潰れるのかという、一つは高齢化であり、二つは、農家に後継者がいないということであり、三つは、今までのような政策をしていたのでは担い手は育たない。平等主義では今までの同じ状況になる。したがって、日本の農業を支える農家の人たちに支援を集中する。バラ撒き型助成からの脱却が必要です。

農地制度の改革
農地を持っていては人たを大切にしない、耕作する人たを大切にしない、すなわち、実際にその農地を使って農業経営をやっている人たを大切にすることが必要です。

農村政策の新ビジョン

将来、日本の農村人口がどのくらい少なくなつて、農地がどのくらい荒廃していくかを認識する必要があります。それから自主性を大切にする。

国で作つたプランを押しつけるのではなく、それぞれの地域で作つた取組に対してサポートする仕組みを作る必要がある。次に攻めの農業である。日本の農業は世界でも非常に優れた農業です。特に日本の消費者はどつるさい人はいません。ですから世界に出したときに超高級ブランドになる。それから伸びる生産者を伸ばすシステム。みんな平等で頭を打つてはなくて、伸びる人はどんどん伸ばしていくシステムを作る。個人が伸びることによって地域が伸びることが大切である。

角田農業戦略プランの現代的意義について

角田の農業というのはある面では日本の他の地域の農業よりも一歩も二歩も先を考えている。また、都市との交流についてはお互いに交流することが大切である。



二回目は角田市民センターで開催され、東京農業大学院教授の生源寺眞一氏を講師に招いて、「食料・農業・農村基本計画の中間論点整理と農政改革の方向について」学びました。以下、簡単に紹介します。

新たに浮上した問題と積み残された課題

五年前にはほとんど考えることがなかった問題の中で最大の問題は、「食の安全・安心」を巡る事故が続発したこと。それに対応して、その制度の改革が急速に進んだ。これは国民の関心があれば相当なスピードで変えることが出来るという事例だと思えます。今後は、農業と食品産業の関係をどう考えるかが大変重要になってくると思う。食料消費支出の八十兆円の内農業の所までいくのは二割弱でしかない。これを何とかしたい。

FTAの問題も農政の分野できちんと受け止める必要がある。

食料の自給率については、「自給力」がどうなっているかを考える必要がある。「率」は横ばいだ、「力」つまり農業の力そのものが下がってきているのが問題ではないか。

政策展開の基本的な考え方 担い手政策のあり方

これからの農業経営の改善に向けた施策の一部は幅広い農業者を一様にカバーするのではなく、対象を担い手に絞り集中的に実施するという方向です。いわば対象者を明確にしてこれからの農業を引っ張っていただく、あるいは価格の変動に非常にダメージを受ける度合いの大きい方を応援するという事です。

望ましい農業構造は担い手を核として兼業農家、高齢農家などを含む地域の関係者が相互の役割分担等について合意形成を図りながら地域農業の再編に取り組みむことです。

農地制度の方向

農地制度の方向そのものはきちんとした規制を組みながら、本当に農業をやりたい方であれば自然人である人と法人である人と出来るだけやっていただくような方向に行くと思います。

資源保全施策

個々の農業経営が直接持つていないわけじゃないけれど、地域全体で守ることによって個々の農業経営の活動が支えられているような資源をきちんと守るような仕組みを、予防的にでも良いから作つていこうということ。

環境保全施策

この国の農業者であれば最低限守つていただくような環境に関する規範を作り出す。いろいろな助成はこの基準を守つていただく要件にする。